

青年期のヘルダーとハーマン

——詩学の問題を中心に——

上 野 英 雄

ヘルダーとハーマンの邂逅。それはヘルダーのケーニヒスベルク大学在学中にまでさかのぼる。ヘルダーがケーニヒスベルクに来たのは、1762年の夏。当初は外科医になるつもりで医学部を志望したが、その後、神学に切りかえている。大学の関係でケーニヒスベルクに来たヘルダーが、奇しくもその地に在住のハーマンに初めて会えたのは、1762年の後半でないか、というのが R. ハイム¹⁾の推定である。具体的にどういう方法で面識をもったかについても、二説があって、決定的な事実は明らかでない。第一の説によると、ハーマンの父は当時、ケーニヒスベルクで „altstädtischer Bader“ (昔の理髪師兼外科医)として、人気をよんでいた。そこへ、たまたまヘルダーが右眼の涙嚢管の治療のために訪ねたのが、息子のハーマンと面識をもつきっかけになったのではないかという説。もう一つの説は、ヘルダー自身のかかなり信頼すべき話によっているが、それによると、二人は教会の告解聴聞席でどちらからともなく知りあったのだという。

ともかく、その1762年という年は、ハーマンが ‚Aesthetica in nuce‘ (美学撮要)を核心とする論文集 ‚Kreuzzüge eines Philologen‘ (文献学者の十字軍)を完成したばかりの年である。年令的にはヘルダーが19歳、ハーマンは33歳であった。当時の青年ヘルダーが、ハーマンとの邂逅とこれにつづく直接交渉によって、思想的にも情情的にも、いかに深い恩恵をうけたか。ヘルダーの妻、カロリーネ・ヘルダーは、次のように報告している。

「ハーマンは高度の熱意をもって、できる限り青年(ヘルダー)を援助すべく鼓舞してくれた。そしてまた、ハーマンは、ヘルダーのよりよき発展のための手段を考え、みずからヘルダーの教育に多大の貢献をすることによって、カンターとともに、その若い、未経験な友人(ヘルダー)のために配慮してくれた。ハーマンはヘルダーといっしょにいくつかの本を読んだ。彼らの志向 *Gesinnungen* の調和は、この精神の伝達によっていよいよ進展させられた。ハーマンはヘルダーに英語を教えた。彼らはシェイクスピアのハムレットを扱った。こういう時間がヘルダーに与えた印象は、ヘルダーにとって忘れがたく、神聖にとどまった。ヘルダーは、しばしば、感動してそのことを語った。ヘルダーはハムレットをほとんど暗記していた。そして、すべての戯曲詩人のなかで、ヘルダーはつねにシェイクスピアを最高と見ていた。この詩人(シェイクスピア)とオシアンについてのヘルダーの知識は、民謡の簡素で感動的な自然語 *Natursprache* にたいするヘルダー固有の共感と支配的な愛着を進展させた……」²⁾

ハーマンの書簡集³⁾によると、ハーマンがヘルダーから最初の手紙を受け取ったのは、1764年6月8日である。この手紙は、ヘルダーがリュベックに旅行中のハーマンの安否をうかがったものであるが、ヘルダーはこれに一篇の詩をそえて、mein Hamann に守護神の祝福あれ！と祈った後で、

「これが、私のあなたにささげる最後の接吻であってはいけません。あなたがお読みなったら、私にも接吻を投げてくださいるように、私はこの手紙を書いているのです。あなたは、私が自分を愛することができるよりも、それ以上によく私を愛して下さっているのを私は知っています。私は偏見によらずに愛しています。神があなたを、私の知るかぎりで最高の人を幸せにお導きくださいますように。そして、ときにはあなたの Joh. Gottfr. Herder を思い出してください。」⁴⁾

この手紙の一節からも、青年ヘルダーが熱烈にハーマンを慕っていたことが理解できるのであるが、一方のハーマンはヘルダーの人物をいかに評価していたか。1764年10月17日付、ハーマンが友人リンドナーにあてた手紙⁵⁾は、ヘルダーがリガの教会付属の学校に就職するに当って、ヘルダーの人物評価をしたものであるが、そのなかで、ハーマンはヘルダーの受容的性格と「感情の鋭敏さ」を高く評価し、また、「ヘルダーはヴェルギールの処女のようなたましいを所有している」という。そして、かなりの範囲にわたる歴史的、哲学的、そして美学的な見解、あるいは、きわめて豊じょうな土地を開拓しようとする野心、異常な学習欲に応じて対象を処理する能力。こういう特質を、ハーマンはヘルダーの人物に認めている。

ヘルダーとハーマンの交渉は、こうして互いに人格を認めあって、腹藏のない信頼と卒直さにもとずいたものであるが、私たちはいま、詩学の問題を考えるに当っては、やはり両者の交渉期間中の著作に従わなければならない。

いったい、ハーマンの著作においては、ゲーテが『詩と真実』のなかで明解に指摘したとおり、「あらゆる力の総体」から思考し、発言する態度がとられる。ゲーテによると、「ハーマンのすべての言説が帰着する原則は次のとおりである。„人間が成就しようと企てることのすべては、それが行為によって、あるいはコトバによって、あるいはその他いかなる方法によって生まれてくるにしても、あらゆる力の総体から発生しなければならない。バラバラのものはすべて排斥すべきである。“」⁶⁾

はたしてこういうことが可能かどうか。ゲーテのいただいた疑問はここにある。なぜなら、人間がコトバで何かを表現するとき、その表現は必然的に全体から分離せざるをえない。分離しなければ何も表現できなくなるからである。ところが、ハーマンは断固として分裂に反対し、すべてを統一的に感じ、想像し、思考する。その結果が、文体の破綻とかたちであらわれたのは必然である。私のいま扱う ‚Aesthetica in nuce‘ の文体もまた、その例外でない。ハーマンの人格がどの Satz にもあらわれているが、Satz と Satz の間に

わたりがない。論理の展開もない。極言すれば、Satz の一つ一つがハーマンの統一的思考体のあらわれである。そこで、以下において、とくに詩学上の観点から、ハーマンの文章をいくつか観照し、ハーマンの „wahre Poesie“ とは何かをさぐってみたい。

まず、冒頭から「詩は人類の母語である」⁷⁾と喝破するコトバが、 „Aesthetica in nuce“ の Fundamentalsatz になる。そして、人間がコトバを話すことは、どんな行為であるかについて、

「話すとは訳すことである。——天使のコトバを人間のコトバに。つまり、思想をコトバに。——事物を名称に。——形象を記号に。形象を詩的あるいは本源的、歴史的、あるいは象徴的、あるいは象形的に。——また、哲学的あるいは特性的にも。こうして（話すことを理解せよという）訳しかたは、他のどんな訳しかたよりも、じゅうたんの裏面と一致する。」⁸⁾

「じゅうたんの裏面」に、ハーマンは Rath (神意) をおいたと見てよい。そしていま、神意と行為を比べてみると、それが神の創造してくれた人間の行為であるかぎり、行為もまた神意の象徴にはかならない。神聖な大地、神聖な自然がわれわれの「感覚と熱情を通して作用する」。が、われわれ人間の感覚にしてすでにツェーレス (ギリシャ神話で穀物の女神)、また、熱情はバッカスの象徴である。感覚と熱情——それは「古代の美しい自然の養父母」である。だから、詩人が「自然の養父母」(感覚と熱情)を麻痺させたら、感受することができなくなる。いったい、これまで「自然の養父母」を殺りくしてきたのはだれだったのか。

これはゴットシェッドを大御所とする当時の啓蒙思潮下のドイツ詩壇への攻撃と見なければならぬ。だが、ハーマンは、あえてゴットシェッドの名はあげず、イギリスのベーコンやニュートン、あるいはフランスのヴォルテールやビュッフォンを名指して、

「自然は君たちの暴虐な行為から逃げるためにベストをつくす。そして自然は、もっとも熱烈な抱擁のもとに、動物がアダムに服したと同じ自由を渴望する。けだし、神は人間のために、自然の様子がわかるように自然を創ってくれたのだ。」⁹⁾

ハーマンはさらに、人間もまた神の所産であるとして、神性を強調する。

「目に見えない神の似姿がわれわれの心情において生き生きしていればいるほど、われわれは被造物における神の愛想をそれだけよく見たり、享受したり、眺めたり、手でつかむことができる。自然が人間におよぼした影響はどんな影響も、根本的真理の記念品であるだけでなく、担保でもある。つまり、主とはだれか、という根本的真理の。」¹⁰⁾

次に、詩人の熱情と自然とのかかわりについて、ハーマンの所論に聞いてみると、

「熱情だけが抽象と仮説に手、足、翼を与える。——形象と記号に精神、生命と舌を与える。」¹¹⁾

しかるに、

「君たちは自然を盲目にする。……君たちは自然を支配しようとする。そして、みずからの手足をストア主義（禁欲主義）によって結わえる。そのため、君たちの雑多の詩のなかで、運命のダイヤモンドの鎖についていっそう感動的に仮声で歌うことしかできない。」¹²⁾

これこそ自然にたいする冒瀆であるとして、ハーマンは絶叫し、ミューズにすがる。

「おお！金細工師の火のようなミューズよ。そして、洗鉱夫の漂鉱床のようなミューズよ！——ミューズは、感覚の自然な使用を抽象の不自然な使用からあえて浄化してくれる。ちょうど、造物主の名が隠され、冒瀆されるのと同じように、物についてのわれわれの概念は、抽象の不自然な使用によって毀損されているのです。」¹³⁾

ハーマンはこうして、抽象による自然の榮譽毀損を神にたいする冒瀆として非難しているが、一方においてまた、

「ギリシャ人よ！私はあなたたちと話したい。なぜというに、あなたたちは靈知の鍵（*gnostischen Schlüssel*）をもった神の侍従よりも自分たちの方が賢明だと思っているのだから」¹⁴⁾と訴え、さらにまた、「人はなぜ、ギリシャ人の穴だらけの噴水のそばに立ちどまるのか？そして、古代のもっとも生き生きとした泉をどうして見捨てるのか？」¹⁵⁾と問われるとき、ハーマンの理想の詩がギリシャ人の詩に典範をもとめたものでもなかったことが分る。

それではいったい、「古代のもっとも生き生きとした泉」から生まれる詩とは何であったか。ハーマンのいわゆる „*wahre Poesie*“ とはいかなる詩であったのか。ここで少しく、R. ウンガー¹⁶⁾の *Interpretation* を援用してみると、ハーマンにとって、

「真の詩とは、純粋な宗教性と同時に自然にたいして健全な、野生的な、そして生き生きとした関係の自然な結実である。これはつまり、原初的な人間にとっては根本的に同一の二つの条件（宗教性と対自然関係）の結実である。これに反して、主知主義的な神や自然の見方の抽象的凋萎（ちょうい）、また、機械的な不自然においては、詩その他すべての創造力が枯死するか、あるいは退化するにちがいない。後者（機械的な不自然）にあっては、前者（宗教性と自然の結実）の根源的な、力強い、そして実質的な敬虔さの、天国と同時に現実の象徴の世界が死滅している。」¹⁷⁾

R. ウンガーはこうして、自然神学と理性神学の対比から、きわめて明解にハーマンの „*wahre Poesie*“ を解釈する。それはたしかに、詩人の敬虔な心情に宿るものであり、純粋な宗教性と同時になまのままの自然をそなえていなければならない。ハーマンはそのような素質をもった理想の詩人として、*Klopstock* をあげている。ハーマンのクロップシュトック評によると、

「クロップシュトック、この偉大な叙情的歌謡の再興者は、自由の建築物をあえて建て

たが、これは思うに、古風な様式である。これはヘブライ人における神聖な詩の謎のような機構を適切に模倣したものだ……」¹⁸⁾

いったい、「ヘブライ人における神聖な詩」、つまり、聖書を典範とした詩はいかにして生まれるのか。「自然の死滅した言語を何によって復活させたいのか。」¹⁹⁾それは神のコトバを知っている人だけが知っている、とハーマンは自問自答し、「神のコトバのなかに予言の精神が生きている」²⁰⁾と教示する。

以上で、私は R. ウンガーの ‚Hamann und die Aufklärung‘ を援用しながら、 ‚Aesthetica in nuce‘ のなかに、ハーマンの ‚wahre Poesie“とはいかなる詩であるかを探ってみたのであるが、 ‚Aesthetica in nuce‘ はいかにも難渋な文体である。ヘルダーによると、「原典のない注」 ‚Noten ohne Text‘ であり、また、「ハーマンの学問は吸い取り紙の上のインクのしみ、……ハーマンの思想は展望であり、ハーマンの展望は断定であって、そこには前提の基礎が欠如している……」²¹⁾

そして、1764年、ヘルダーがケーニヒスベルクからリガの教会付属の学校に赴任する直前か、直後に、ヘルダーは、 ‚Dithyrambische Rhapsodie über die rhapsodie kabbalistischer Prose‘ (ヘブライ神秘的散文体の叙事詩についての熱狂的叙事詩) という解説を書いている。しかし、ハーマン自身は1774年、「たしかに、私の種子 (Saamenkörner) のいくつかは、ヘルダーの苦心とペンによって花と花盛り (Blumen und Blüten) に変えられたようであるが、私としては、しかし、果実と熟した果実 (Früchte und reife) をのぞむ、」²²⁾という。このことから、ヘルダーの解説が、必ずしもハーマンの意にそうものでなかったことが理解できる。ヘルダー自身も、自分の ‚Aesthetica in nuce‘ の解釈が不完全だったことに気づいて、その後、 ‚Fragmente über die neuere deutsche Literatur‘ の執筆中には、逐次ハーマンに原稿を送って、ハーマンの意見を求めている。その辺の事情を少しく、手紙のなかからさぐってみると、まず、1766年2月、ヘルダーがリガからハーマンにあてた手紙のなかで、

「…その後、私は ‚Fragmente‘ の第1部をすっかり改作して、第2部のなかばまで来ました。第2部はわが国の文学について扱う予定です。われわれが東洋人をいかに模倣したか……われわれがギリシア人をいかに研究し、翻訳したか……われわれがローマ人……フランス人やイギリス人をいかに模倣しているか、を。…」²³⁾

これにたいしてハーマンは、同年3月4日付でヘルダーにたいして、

「…あなたは第1部を改作したのだから、私はそれだけいっそう新しいことを聞くことを期待しています。その完成が構想と同様にうまく行くならばと、私は前もって出版者に幸運をのぞみます。」²⁴⁾

また、1766年3月には、ヘルダーは自分の原稿に手紙をそえて、

「…ご随意に訂正して下さい。生まれたばかりの批評家として原稿をお読み下さい。そして、あなたのご意見を、とくに悪意と遠慮と不平と危険といたわりをお書き下さい。」²⁵⁾

ハーマンはこれに答えて、同年3月24日付で、

「…構想と完成の順序、豊富、すばらしさに私はまったく満足しています。そして、洞察と思いつき、はい芽と花と果実の宝庫を喜ばしく思います。……たとえば、Naturgenieのようにへたに結びつけたり、合成したコトバがまだいくつか残っていました。また、文体もいくつかの箇所ではチパチ音をたてており、疑問詞、感嘆文、間投詞によって美文がすっかりひき裂かれています……」²⁶⁾

ヘルダーがこのようにハーマンからの忠告を仰ぎながら、しかも、*„Aesthetica in nuce“*の5年後に仕上げられた *„Fragmente über die neuere deutsche Literatur“* には、当然、ハーマンの影響が強く感じられる。そこで、私は以下において、ハーマンの影響と思える箇所を、*„Fragmente“* のなかから具体的に抽出する試みをしたい。

まず第一に、ヘルダーが *„Fragmente“* のなかで、言語年令を設定して、ドイツ語の特徴を論じた点である²⁷⁾。ハーマンは「詩は人類の母語である」と喝破したが、ヘルダーによると、幼年時代の国民の言語は激情の言語である。その音を発するコトバが身振りとともに歌謡になる。こうして形象と隠ゆで語られるコトバは、詩的な言語年令 *das poetische Sprachalter* に属する。詩人は歌謡のなかで、注目すべき行為を永遠にするために、リズムのなかでアクセントを高めた。この後に成人年令 *das männliche Alter* が来る。詩が下降し、自然からはなれて、芸術になるとき、美しい散文が形成される。これは言語の詩的自由を減少して、詩のリズムを低下させる言語年令である。そして最後に、美の代りに正確さを尊ぶ高年令 *das hohe Alter* にいたるのであるが、これは言語の哲学的時代である。

ところで、ドイツ語の年令はちょうど散文の年代に当たっている。これは詩的年代へも、哲学的年代へも向かえる時期であって、もっとも好都合の時代である。ドイツ語には同義語や特殊語法や倒置法が多い。このことは、現代散文の根が詩の母胎に根ざしていることを示す。また、母音の充実と気音 *Hauchlaute* の豊富さも、ドイツ語の特徴である。フランス語は、その抽象的な文化の結果、構造上の自由が失なわれて、ドイツ語よりも劣っている。これに反して、ドイツ語は詩人にも散文家にも哲学者にも扱いやすい道具である。それにもかかわらず、われわれがフランス語を学び、英語を学ぶのは、フランス語の軽やかさ、明るさと英語の力強さを学ぶためである。

ハーマンの影響として第二にあげたいのは *Kadenz* の問題である。ハーマンは *„Aesthetica in nuce“* の最後のところで、クールラントやリフラントの民族歌謡のなかに *Kedenza* (声の下げ) を発見しながらも、民族詩の特徴である韻律の問題が解明できなかったことを惜んでいる²⁸⁾。ヘルダーによると、古代人の *Hexameter* は、その青年期の言語年令

において生まれたものである。²⁹⁾ 人々はふつうの生活のなかで歌い、詩人はリズムをつけて、アクセントを高めた。当時、Hexameter は自然な韻律だったのだ。ところが、現代の言語は、音声が豊富であっても、音の高さに乏しい。だから、「子どもたちの歌のなかで Kadenze を聞け」、「最古の教会の歌に注意せよ」とよびかけて、その音の落ちかたは短く、リズムは単調であるという。

第三には、東洋の詩の学びかたと民族詩の発掘の問題である。ハーマンも、*„Aesthetica in nuce“* のなかで、「アラビアへの巡礼」をすすめているが、ヘルダーにヘブライ古代のより徹底した知識を拓いたのは、Johann David Michaelis である。東洋人は歴史と宗教を詩に変えることができた。「東洋人が発明したものを奪うのではなく、発明のしかた、詩の作りかた、そして、服の着せかたを奪え！」³⁰⁾とヘルダーはいう。東洋人（ヘブライ人）が、自分の言語と考えかたと世界から成しとげたものをドイツ人は自分のものをもってなせ。ドイツ人は、東洋人がしたように、自分の詩的材料を自分自身の故郷に求めなければいけない。古代の国民歌謡を調べていけば、先祖の詩的な考えかたに入って行けるはずだ。こうしてヘルダーは、一方で外国の詩の誠実な翻訳をすすめ、他方で古代の国民歌謡にもどることをすすめているが、これはいずれも、根源的な民族詩の発掘をめざした点で一致していると思える。

第四には、Klopstock の評価である。ハーマンがクロップシュトックを理想の詩人としてあげたことは先にのべたが、ヘルダーも、クロップシュトックの *„Messias“* を「最も崇高なドイツ的東洋的な作品」と見る³¹⁾ *„Messias“* はただ東洋的なものを注視しただけでなく、キリスト教の内容と叙事的な性格にもかかわっている。

第五には、ラテン文化の批判とドイツ文学の独立性の強調である。ヘルダーによると³²⁾ ローマの文学は、ドイツ文学にたいして利益よりも、むしろ不利益をもたらした。キリスト教の導入とともに、ローマの修道僧は、最も悪いローマの精神とコトバをドイツにもたらした。そのために、われわれドイツの精神と言語の特性、国民的性格が奪われていったことは、恥ずべきことだ。学問、文学、教育の状態は、もっぱらラテンの色彩を受け、われわれの言語はラテン化されて、退化する。われわれの言語は、ルッター、ローガウ、オーピッツやローエンシュタインのコトバにもどらなければいけない。ラテン語教育の Pedantismus は、若きたましいの生気をおさえて、天才を抑圧する。人は母国語においてだけ詩作するのだ。だから、この一つのコトバ、母国語を完全にマスターしなければいけない。「真の独創的詩人はつねに国民的詩人である。」³³⁾ ドイツ文学は独自のドイツ的、国民的な足場に築かれなければならない。

第六には、頌詩 Ode についての見解である。1765 年 8 月 29 日付のハーマンからの手紙³⁴⁾には、Ramler の頌詩がそえられている。ヘルダーは頌詩を Affekt (激情) の頌詩と Handlung (行為) の頌詩に分けているが、Ode は「感受から生まれた子ども」だとして、

すべての詩の源泉と見る。³⁵⁾そして、Ramlerを「頌詩の完全な模範」の詩人としてたたえ、Klopstockの頌詩は「心の自己刻印」だとしている。

最後に、七番目になるが、神話の新しい使用についての見解をあげたい。ハーマンの ‚Aesthetica in nuce‘ のなかにも、„Mythologie hin, Mythologie her“ (神話は去った、神話よ来たれ) という簡潔なコトバが見出される。ヘルダーは、古代の神話が人格化され、寓意化されたとき、ギリシャ人が詩的想像力をもってどうしたかを学べ。寓意化する技術をギリシャ人から学びなさい、という³⁶⁾。そして、古代人の神話を文学の足場として使うことは易しい。それよりも、神話に新しい意味づけをすることが大切である。ちょうどレッシングが寓話を作ったように、ヘルダーも神話を新しく生かすための試みをしている。そしてさらに、古代のイソップ物語から新しい寓話が発明されるように、古代人のすべての神話がわれわれに独自の神話発明の宝庫として役立つようにと願っている。

以上で大きく七項目にわたって、ハーマンの思想の影響と思える点を、ヘルダーの ‚Fragmente über die neuere deutsche Literatur‘ のなかから抽出してみたのであるが、なるほど、ヘルダーにおいては、ハーマンの言簡にして意の深いセンテンスが、分り易く敷衍され、進展されてはいる。けれども、こうした敷衍と進展の方向が、どこまでハーマンの意にそえるものであったか。ただ、はっきりいえることは、ハーマンの ‚Aesthetica in nuce‘ がヘルダー詩学にさまざまなぎっかけと動機を与えてくれたということである。

【注】

- 1) R. Haym: Herder. 1954. Berlin. I.Bd. S.71.
- 2) Hans Reisiger: Johann Gottfried Herder. Sein Leben in Selbstzeugnissen, Briefen und Berichten. 1970. Georg Olms Verlag. Hildesheim. New York. S. 35.
- 3) J.G. Hamann Briefwechsel. in 7Bdn. hrsg. von Walther Ziesemer und Arthur Henkel. 1955~. Insel-Verlag.
- 4) ibid. 2.Bd. S.259.
- 5) ibid. 2.Bd. S.270.
- 6) Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. 9.Bd. S.514~515. („Dichtung und Wahrheit“. 3.Teil. 12.Buch.)
- 7) J.G. Hamann Sämtliche Werke. hrsg. von J. Nadler. 1950. Wien. 2.Bd. S.197.
- 8) ibid. 2.Bd. S.199.
- 9) ibid. 2.Bd. S.206.
- 10) ibid. 2.Bd. S.207.
- 11) ibid. 2.Bd. S.208.
- 12) ibid. 2.Bd. S.208.
- 13) ibid. 2.Bd. S.207.

- 14) *ibid.* 2.Bd. S.207.
- 15) *ibid.* 2.Bd. S.209.
- 16) R. Unger: Hamann und die Aufklärung. 1963. Tübingen. 1.Bd. S.233ff. „Das zusammenfassende prinzipielle Bekenntnis (die „Aesthetica in nuce“)“.
- 17) *ibid.* 1.Bd. S.256~257.
- 18) J.G. Hamann *Sämtliche Werke*. hrsg. von J. Nadler. 1950. Wien. 2.Bd. S.215.
- 19) *ibid.* 2.Bd. S.211.
- 20) *ibid.* 2.Bd. S.212.
- 21) Hans-Martin Lumpp: *Philologia crucis. Zu Johann Georg Hamanns Auffassung von der Dichtkunst. Mit einem Kommentar zur ‚Aesthetica in nuce‘*. Max Niemeyer Verlag. Tübingen. 1970. S.181.
- 22) *ibid.* S.182.
- 23) J.G. Hamann *Briefwechsel*. in 7Bdn. hrsg. von Walther Zieseemer und Arthur Henkel. 1955~. Insel-Verlag. 2.Bd. S.359.
- 24) *ibid.* 2.Bd. S.361.
- 25) *ibid.* 2.Bd. S.363.
- 26) *ibid.* 2.Bd. S.364.
- 27) J.G. Herder *Sämtliche Werke*. hrsg. von Bernhard Suphan. 1967. Georg Olms Verlagsbuchhandlung. Hildesheim. 1.Bd. („Ueber die neuere Deutsche Litteratur.“) S.151 ff.
- 28) J.G. Hamann *Sämtliche Werke*. hrsg. von J. Nadler. 1950. Wien. 2.Bd. S.216.
- 29) J.G. Herder *Sämtliche Werke*. hrsg. von Bernhard Suphan. 1967. Georg Olms Verlagsbuchhandlung. Hildesheim. 1.Bd. S. 198ff.
- 30) *ibid.* 1.Bd. S.258ff.
- 31) *ibid.* 1.Bd. S.296ff.
- 32) *ibid.* 1.Bd. S.361ff.
- 33) *ibid.* 1.Bd. S.402.
- 34) J.G. Hamann *Briefwechsel*. hrsg. von Walther Zieseemer und Arthur Henkel. 1955~. Insel-Verlag. 2.Bd. S.347.
- 35) J.G. Herder *Sämtliche Werke*. hrsg. von Bernhard Suphan. 1967. Georg Olms Verlagsbuchhandlung. Hildesheim. 1.Bd. S.450ff.
- 36) *ibid.* 1.Bd. S.426ff.

【付記】 昭和51年10月11日、仙台市民会館における日本独文学会秋季研究発表会で、「若きヘルダー」の研究分科会がもたれた。司会は中野康存、七字慶紀の両氏。発表者とテーマは：1. 七字慶紀「ドイツにおけるヘルダー研究の動向」、2. 江村洋「『旅日記』におけるヘルダーの世界観」、3. 木村直司「ヘルダーの初期言語論における二、三の問題点」、4. 上野英雄「青年期のヘルダーとハーマン——詩学の問題を中心に——」。本稿は、その機会に発表した拙稿に注を付したものである。

Zusammenfassung : Der junge Herder und Hamann

— Über die Probleme der Poetik —

Hideo UENO

Herders Begegnung mit Hamann geht auf Herders Studentenzeit in Königsberg Universität zurück. Es war den Sommer im Jahre 1762, als er nach Königsberg gekommen war, in die medizinische Fakultät einzutreten. Aber bald wechselte er in die theologische Fakultät über. Hamann hatte damals dort gewohnt. Nach den Erlebnissen in London (im Jahre 1756) hatte er sich in die Forschungen der Bibel und der Ästhetik vertieft, um als Ästhetiker geachtet zu sein. Nach R. Hayms Urteil war es in der letzten Hälfte des Jahres 1762, daß beide sich begegnen konnten. Übrigens war es gerade in demselben Jahr, in dem Hamann seine Schriftensammlung ‚Keuzzüge eines Philologen‘, worin ‚Aesthetica in nuce‘ am wichtigsten ist, veröffentlicht hatte. Damals war Herder 19 Jahre alt, Hamann 33. Welche großen Einflüsse sind auf den jungen Herder durch diese Begegnung und seinen Verkehr mit Hamann sowohl gedanklich als im Gespräch ausgeübt worden?

Karoline Herder, Herders Frau, berichtet : „Hamann belebte in hohem Grade der Eifer, Jünglingen hilfreich zu sein, wo er konnte, und so sorgte er auch mit Kanter für seinen jungen, unerfahrenen Freund, indem er auf Mittel zu seinem besseren Fortkommen dachte und selbst zu seiner Bildung viel beitrug...“ (H. Reisiger : J.G.Herder). Nach Hamanns Briefwechsel mit Herder ist es im Juni 1764, daß Hamann auf der Reise nach Lübeck Herders ersten Brief empfangen hatte. Darin schreibt Herder mit einem Gedicht an Hamann : „...ich weiß , Sie lieben mich mehr als ich mich lieben kann, nicht nach dem Vorurteile liebe. Der Himmel führe Sie den Besten, den ich kannte, glücklich, u. erinnere Sie bisweilen an Ihren Joh. Gottfr. Herder.“ (J.G.Hamann Briefe. 2.Bd.). Man kann aus dem Brief ersehen, wie innig Herder ihn geliebt hat. Wie aber sah Hamann dagegen den Freund? Hamann schreibt am 17. Okt. 1764. an seinen Freund, J.G. Lindner, einen Empfehlungsbrief, damit dieser Herder in der Domschule zu Riga eine Einstellung gewährt. Darin sagt er über Herders Persönlichkeit : „Bey einem ziemlichen Umfange historischer, philosophischer und ästhetischer Einsichten und einer großen Lust den fruchtbarsten Boden anzubauen, bey einer mehr als mittelmäßigen Erfahrung der Schularbeiten und einer sehr glücklichen Leichtigkeit sich zu bequemen und seine Gegenstände zu behandeln, besitzt er (Herder) die jungfräuliche Seele eines Virgils... und die Reizbarkeit des Gefühls...“ (ibid.). Beide erkennen die Grundzüge ihrer Persönlichkeiten und sie verkehren mit einander mit Vertraulichkeit und Freimütigkeit. Wir sollen auch in Bezug auf die Probleme der Poetik die Schriften beider Männer während des Verkehrs aufmerksam lesen.

Im 12. Buch des 3. Teils von ‚Dichtung und Wahrheit‘ schreibt Goethe, Hamann

denke und schreibe immer „aus sämtlichen vereinigten Kräften“, alles „Vereinzelte“ sei für ihn „verwerflich“. Ist dies möglich? Goethe zweifelt daran. Nach seiner (Goethes) Meinung muß sich der Ausdruck notwendig vom „Sämtlichn“ trennen, wenn man mit der Sprache irgendetwas ausdrücken will. In der Wirklichkeit wehrt sich aber Hamann immer gegen das „Vereinzelte“. Er empfindet, denkt und schreibt konsequent im Sinn des Ganzen, nicht des Vereinzelten. So ist die Aussage jedes seiner Sätze äußerst komprimiert. Im Sinn des traditionellen Logik scheint zwischen den Sätzen oft kein notwendiger Zusammenhang zu bestehen. Indem wir solche Sätze anschauen, möchten wir herausfinden, was in der ‚Aesthetica in nuce‘ Hamanns Auffassung von der „wahren Poesie“ ist.

„Poesie ist die Muttersprache des menschlichen Geschlechts.“ (Aesthetica in nuce‘). Das ist der Fundamentalsatz der Schrift. „Reden ist übersetzen...Diese Art der Übersetzung (verstehe Reden) kommt mehr, als irgend eine andere, mit der verkehrten Seite von Tapeten überein.“ (ibid.) Hamann hält „die verkehrte Seite“ für „Rath“. Nach Hamann ist auch die menschliche Tat nichts anders als ein Symbol des Gottesrats. Die heilige Natur wirkt bei uns durch den Sinn und die Leidenschaft. Wenn der Dichter seinen Sinn und seine Leidenschaft lähmte, kann er nichts empfinden. „Leidenschaft allein giebt Abstractionen sowohl als Hypothesen Hände, Füße, Flügel;—Bildern und Zeichen Geist, Leben und Zunge.“(ibid.)Die damaligen Dichter haben sich selbst ihre Hände und Füße „durch den Stoicismus“ gebunden. Das ist eben die Schändung gegen die Natur. Hamann hält aber auch die griechischen Poesien für keine idealen Typen der Poesien. „Warum bleibt man aber bey den durchlöcherten Brunnen der Griechen stehen, und verläßt die lebendigsten Quellen des Alterthums?“ (ibid.) Hamanns wahre Poesie entsteht aus „den lebendigsten Quellen des Alterthums“. Wie sieht nun die wahre Poesie aus? R. Unger gibt uns eine Interpretation dieser Ästheik: „Wahre Poesie...ist die natürliche Frucht echter Religiosität und zugleich eines gesunden, urwüchsigen und lebendigen Verhältnisses zur Natur, zweier seelischen Bedingungen also, die für den Elementarmenschen im Grunde eins sind.“ (R. Unger : Hamann und die Aufklärung. 1.Bd.) Sie wohnt in der Frömmigkeit des Dichters. Und Hamann verkündigt uns, der Geist der Weisung lebe im Wort Gottes.

Nach Herder ist Hamanns ‚Aesthetica in nuce‘ „Noten ohne Text“ (H.-M. Lupp: Philologia crucis.), Hamanns Wissenschaft „ein Tintenfleck auf löschpapier“ (ibid.). Schon 1764 hat auch Herder deshalb eine Erläuterung von ‚Aesthetica in nuce‘, im Titel ‚Dithyrambische Rhapsodie über die rhapsodie kabbalistischer Prose‘, verfaßt. Hamann sagt aber: „Es ist wahr, einige meiner Saamenkörner scheinen sich durch Herders Fleiß und Feder in Blumen und Blüten verwandelt zu haben; ich wünschte aber lieber Früchte und reife.“ (ibid.) Nach diesem Wunsch Hamanns hat Herder dann 5 Jahre später eine große poetische Schrift, ‚Fragmente über die neuere deutsche Literatur‘, verfaßt. Diesmal hat er aber während des Verfassens immer wieder um Hamanns Meinungen gebeten. Zum

Beispiel schreibt er März 1766 an Hamann: „Sie zu besänftigen schicke ich alles, was ich habe, 3. Mscrpte, u. den Vives; Ändern Sie in den ersten nach Belieben, lesen Sie als mein erstgeborener Kunstrichter u. schreiben Sie mir Ihre Meinung sonder Arglist, Rückhalt, Fehd, Gefährde, u. Schonen.“ (J.G. Hamann Briefe. 2.Bd.) Darauf antwortet Hamann den 24. März 1766 an ihn: „Mit der Ordnung, dem Reichthum, der Schönheit des Entwurfs sowohl als der Ausführung bin im Ganzen zufrieden und freue mich über den Schatz der Einsichten und Einfälle, der Keime, Blüten und Früchte.“ (ibid.) Bei der Niederschrift der ‚Fragmente‘ fragte er immer wieder Hamann um Rat. Wir sollten also in den ‚Fragmenten‘ Hamanns große Einflüsse vermuten. Beim Lesen der ‚Fragmente‘ scheinen mir 7 Gesichtspunkte wichtig zu sein.

1) Herder hat „die Sprachalter“ festgestellt und die Eigentümlichkeiten der deutschen Sprache erörtert. (Suphan: J.G. Herder Sämtliche Werke. 1.Bd. S.151ff.)

2) Er hat geraten, in den Gesängen der Kinder und der Kirchen „Kadenzen“ zu hören. (ibid. S.198ff.)

3) Er hat die Art und Weise belehrt, wie man die orientalischen Poesien lernen soll, und dazu angeregt, die alten Nationallieder auszugraben. (ibid. S.258ff.)

4) Er hat Klopstock als einen höchsten idealen Dichter geschätzt, wie Hamann. (ibid. S.296ff.)

5) Er hat die lateinische Kultur kritisiert und die Unabhängigkeit der deutschen Literatur betont. (ibid. S.361ff.)

6) Er hat die Oden sowohl des Affekts als der Handlung für eine Quelle der Poesien gehalten. (ibid. S.450ff.)

7) Er hat eine neue Meinung vom Gebrauch der Mythologie geäußert. (ibid. S.426ff.)

Herder hat in den ‚Fragmenten‘ Hamanns poetische Gedanken der ‚Aesthetica in nuce‘ erweitert und entwickelt. Doch zweifele ich daran, ob die Richtungen seiner Erweiterungen und Entwicklungen für Hamann zufrieden stellend sind. Es ist dennoch sicher, daß Hamanns ‚Aesthetica in nuce‘ für Herders Poetik von großer Bedeutung war.

(Kanazawa, im Oktober 1976)